

## 禪における意味と形式の問題

— その言語學的アプローチ —

### 長谷部 好一

事物の内容は、それが有形のものであれ、無形のものであれ、表現と俟つて初めて内容が内容として知覺される。内容は形式との關係に於て意味として捉えられるから、總てに意味と形式の両面が存在するわけである。繪畫、詩、彫刻、音樂等は異つた素材を以つて意味を表現しており、それぞれ固有な役割と長所がある。

禪に於て體驗内容は、言語道斷、心行所滅と云われ、體驗の領域では、言語は全く無力なものと看做されており、内容と形式との間に著しい乖離があるように考えられている。

近代の言語學は、神經生理學や心理學の研究成果を参照しつゝ、純粹に理論的、科學的にこの種の問題の解明を試みようとしているが、方法的に對蹠的立場に立つ、二つの見方が存在する。即ち意味論と構造言語學の理論である。意味論は言語表現の背後にある内容の構造や心的状態を重視して、言語現象を見ようとするが、構造言語學では、言語形態や外部構造が意味を決定する重要な要素であるとする。體驗を特に重視する宗教では、感覺的に知覺し得る外部言語形式の不備が強く意識されるため、意味を喚起するための副次表象たる内部言語形式の補助によつて傳達の完全を期そうとする。

而し内容もしくは心的現象理解のすれから特定の記號に對する解釋

に相違を來し、言語レベルの齟齬を生ずることが往々にしてある。意味が豫め想定されている場合でも、外部言語形式は必ずしも一定ではない。従つて、ある表現が生み出された根元的な意識の世界に立入らずして意味を理解しようとする時、見解の相違が生ずるので、ここに公案學道の意義がある。その第一段階では、被傳達者を、一定の心的状態に導くことが要請され、ある種の公案が導入の條件として必要となつてくる。その場の設定が十分に爲されれば、天下の老和尚に瞞ぜられることなく、千處萬處一時に透る底の自在性が得られるというものであろう。ここでは一般の論理形式は排除され、一種の前論理的思惟 *mentalis prelogique* の領域で、非論理などと呼ばれているものの、それは嚴密な意味で最早論理の世界ではない。この非論理的敘述形式のパターンを、無意識の世界に處して、即物的に讀みとつていくことが公案學道に於て重要になつてくる。

さて神經生理學的研究によると、人間の注意の外にある無意識の世界は廣大な分野で吾々の精神機能と腦の活動は大部分この領域に屬すると云われている。一體、感覺に上らぬものに關しては、言葉による表現が不十分であるとされるが、禪の語錄などにも、了了見本心などあるように、宗教的體驗は、必ずしも感覺に上らぬとは云い難いが、述語せられたものには、反省や追想が加わつているから無意識的なものとも云うべきであらうか。それが意識的なものに媒介され、意識的なものに移行し、言語に定型化したものが公案として展開する。その際、記號化された無意識的なものは意識に影響し、表現し難いもどかしさを鎮める一方、言語は無力と云われるものの、無意識の世界で作用している（催眠術の例）従つて前述の豫備的導入のための公案は言語化されたものを無意識の世界へ還元

させつゝ、反覆的集中作業によつて明瞭に認知させる。言語は注意を必要としない自動運動と見なされるから、構音メカニズムには比較的無意識のまゝでも言語化され得るが音節の少い單純なものがその際効果的なので、無言、唯言などが取擧げられたのである。かくて公案の意識的導入から、進んでそれが無意識の世界に觸合して無對立の状態に到り、清明な意識が公案と一體化する時、一應その機能を停止する。このように體驗の宗教は於て言語は内の心象を象徴的に指示しつゝ、生命の祕義を形象化し、體驗を通して得られた信は、その内面生活の様態を他に傳えるため一定の形式が與えられる。同時に内面の言葉は萬人共通の場へ齎らされる。それは個別的、特殊的なものの一般化とはなるが、同時に絶えず特殊へ還元しようとする動きがあり、かくすることによつて本來のみずみずしい感動を保ち続けようとする。同様に、意識的なものから意識的なものへ移行し言語化された記號は、究極的に元の心理的な體驗へ還元することによつて初めて記號の眞の意味が把握される。

學的認識は地圖になぞらえて説明されることがあり、map theory と呼ばれているが、禪に於ける記號も同様な働きをもっている。地圖があつても、そこに記載されている特殊な記號の讀み方を知らなければ、地圖は用を爲さない。その適切な使用によつて事物の所在を確め得るが、地圖そのものは飽くまでも便宜的約束による記號に過ぎず、事物そのものではない。同様に宗教的體驗の世界で、言語の果す役割には自ら限界がある。而し體驗の世界の表出で論理的に説明可能なものがあるとすれば、そのような論理を眞とするような記號操作の構造がどこかにあることになる。

構造言語者は、刺戟と反應の機械的關係によつて、言語の本質を

禪における意味と形式の問題（長谷部）

説明しようとして試みているが、表面的な刺戟を反應の記述から言語行為の意味を定めることは、少くとも宗教的體驗を問題とする限り妥當とは云い難い。

言語の意味は、それを使用する者が、如何なる心理的場に於て、なんの目的で、またどのような働きをさせることを期待して用いるかを考慮して解釋さるべきである。しかも記號は、それが指示するものとの間に必然的な直接の物理的因果關係や一對一の對應關係はなく、人爲的約束に過ぎず、その對應關係は記號が用いられる場の特殊性によつて一定なものでないことを確認しておく必要がある。

1 言語はその一般的概念的 성격の故をもつて對象を知覺の直觀的形態に於て再現し得ないが、直接體驗の現實相を飽和状態に於て受容させるため指示を與えつゝ被傳達者を類似の心的レベルに導き更に一連のバターの使用により還元的に傳達者と略、同一の心的状態に到達させようとする。

2 構造言語學の立場からある言葉が使われる場は多種多様であるが凡ゆる場洩れなく集めることは不可能であること、同一の場に於けるある言葉に對する反應は人によつて千差萬別であるとの二點から意味に對する不信を表明する。同様な場に自らを置き他の心的状態を内省によつて知るのは單に憶測の域を出ない非科學的方法であるとする。